

被災地を見てすべきこと～建築で人を動かす～

北海道大学大学院工学院建築都市空間デザイン専攻修士一年 遠藤 知也

建物がどのように作られるか、どのような事に弱く、どのような事に強いか、ある程度漠然としたイメージを世の中の人に浸透させることは、非常に難しいことではあると思う。しかしながら、それが出来れば、災害に対する人々の動きはより良いものになるのだろうと思った。

2011年3月11日に発生した東日本大震災が発生した頃、私は自宅の4階の部屋にいました。大きな揺れを感じた瞬間、入口の扉を開け、サイフを持ち、物が落ちてこない場所で小さくなっていました。揺れがある程度治まった頃、階下に降り管理人の無事を確認した。一緒にテレビを見て、震災の規模を知った。マグニチュード9.0という日本観測史上最大の地震、知り合いの何人かが東北へ帰省しており、連絡が取れない状態の人もいた。

震災の被害を直接受けていない北海道に住む私は、精々テレビやネット、教授からの情報でしか震災の被害を知りえなかった。私は震災というものの大きさを漠然とはイメージはしながら、震災地には関わりはしないだろうと思っていた。しかしながら、教授と一緒に東北へ建物の調査に行くことになった。

2011年6月中旬、仙台空港へ向かうことになった。初日はとりあえずレンタカーを借り、東北大学の協力をすることに。仙台空港を降り、シャトルバスに乗った時、真っ赤に染まった木々が印象的だった。津波によって運ばれた塩により腐ったのであった。

東北大学では結局教授が別の事で忙しく、被災地を周り状況を把握するという目的で、様々な地域を回った。塩亀、石巻、気仙沼、行けない場所も多かったが、建物の破壊の様子を見て回った。津波により5、6階建てのアパートの上に打ち上がった車、基礎からゴッソリ無くなった跡地、海の砂浜のように様々なゴミと共に砂まみれとなった町を歩き回った。小学校には被災者関係者が持ってきた物が集まり、小さな丘には折り鶴や花束が置かれていた。回っている途中にボランティアキャンプにも訪れた。海が来ない山の麓、少し歩くと上述したような光景が見えた。主観ではあるが、その人たちは悲しむでもなく、面倒臭がりもせず、黙々と復興の活動をしているように見えた。

被災から3ヶ月、かなり時間が経っていたように思っていたはずである。にも拘らず、まるで昨日被災したかのような光景がそこにあった。2012年9月現在、復興は未だに終わっていない。災害の大きさは過去最大のものではあったが、それに対する活動も過去にはないレベルで行われている。日本赤十字は現在総額3600億円もの義援金を出し、来年3月末まで義援金受付を続けるという。海外からの義援金もあり、物資についても不必要なものもあったものの、支援はされ続けている。しかしながら、このような活動があり、復興

が進まないのはなぜだろうか。私は、防波堤、建築物などへの根拠のない信頼が原因ではないかと思った。

津波で言えば、岩手県大船渡市にて最大潮上高 40.1m を記録したという。そのような津波から町を守る防波堤を作るためのお金をすぐには用意できない。だったらその町に住まなければ良いという話にはなるが、住民としては面白い話ではない。住民が納得したとして移り住む先が決まったとしても、自治体にお金がなく、なかなか上手くいかないという話もある。確かにお金の話は重要ではあるのだが、命あつての物种、間誤付いては、この災害での経験の意味がない。

建物で言えば、全ての建物が耐震改修出来ているわけではない。ここ数年で建てられた建物であればある程度大丈夫ではあるが、昔に建てられた建物が全て耐震チェックを受けてはいない。多分大丈夫だろうという楽観的な考え方が蔓延している。大丈夫だろうと言えば、福島原発などもその考えもその一つであろう。原発ほどしっかりした建物が、壊れて放射能を出すなんてありえない。多分なんとかなるだろうという考えである。

建物がどのくらいの振動に耐えられるのか、どのくらいの力に耐えられるのか、それは数値として一般人に出したとしても理解されるのは難しい。建築の学生でもある程度勉強しておかなければ、どのくらいの力を受けた時に建物のどの部分が危ない状態になるのか、というのを想像するのも難しい。もし、そのような「建築物」がどれほどの「強さ」と「弱さ」をある程度国民全体が意識として持てるような教育がされ続けたらどうだろう。建物の発注主は耐震などにも敏感になるだろう、自治体や住民は今住んでいる地域への危機感を持てるようになるだろう。行き過ぎた行為に及ぶ可能性もあるかもしれないが、少なくともよく分からないと考えることを止めることはないだろう。

国や大学は今起こっている出来事に対する対策、近い未来発生するだろう災害に対する対策を打ち立てるが、一番動くことができるのはその被災した地域の住民やその周辺の人々である。将来、「建築」の常識を作っていくことが最重要なのではないかと私は思う。